

私は今まで、海外に行くことがあっても、観光地しか訪れたことがなかったので、東ティモールとはどんな国なのか、全く想像出来ませんでした。日本を出発してからも、少し不安を感じていました。しかし、空港から Dili の街に飛び出した瞬間、今まで感じたことのないようなワクワク感が、心の底から湧き上がって来ました。この不思議な東ティモールの力を作っているものは一体何なのか、今回は、Letefoho という村で経験したことを書かせて頂きます。

## Letefoho 1 日目

まず、Dili から Letefoho までの道のりで、私が最も驚いたのは、道の悪さです。舗装された道路は途中までしかなく、残りの道は砂ぼこりがひどく、大きな石がゴロゴロ転がっているような道でした。そんな荒れた道で感動したのは、私たちが車から手を振った時に誰もが笑顔で振り返してくれたことです。この人々の陽気さに励まされたのか、私たちは一度も車に酔うことなく、むしろ日本で経験することのできないこの道を思いっきり楽しむことができました。



到着したのが夕方だったので、時間はあまりなかったのですが、短い時間でも Letefoho の人々の温かさに驚きました。最初は、家の中や外から興味津々な様子で恥ずかしそうにこちらを見てくるので、少し挨拶をするのをためらいましたが、思い切って「Boa tarde!」というと、たくさんの人が笑顔で手を振ってくれたり、話しかけに来てくれる男の子までいました。シャイなところは、少し日本人に似ていると感じました。この山奥の村に、外国人が訪ねてくるのは滅多にないことだと思いますが、本当に温かく受け入れてもらいました。

そしてあたりが真っ暗になった頃、空には今までで見たことのない数の星が、夜空一面に広がっていました。プラネタリウムのように、はっきりと星座や天の川が見え、たくさんの流れ星を見ました。

## Letefoho2 日目

鶏の鳴く声で目覚め、高台にある教会に行き、朝日を見ました。その景色は本当に美しく感動しました。その後、朝ごはんのドーナツを買うおつかいをしました。教えて頂いたテトゥン語を話して買ったドーナツはとても美味しかったです。Letefoho では商店街のように小さなお店がたくさんあって、コミュニティの中で経済が回っています。

その後、車で村落に行き、コーヒー農家さんに一日密着しました。その家族は、父、母、娘6人の8人家族で、お父さんのアルマンドさんは10人編成のコーヒーチームのリーダーの方でした。アルマンドさんにインタビューした中で最も驚いたのは、「重要なのは、仕事をして、お金を貯めて、教育のためにお金を使うこと」と話していたことです。学校は必要ないからと行かせていない家庭や、学校に行きたくないから通っていない子がいるなど、まだ教育が浸透していない Letefoho で、こんなにも広い視野で先進的な考えを持っている方がいるとは思いませんでした。その後、村落のリーダーの方に家を建てたり改築したりするときに催されるフェスティバルのことや、その時に使う traditional house という建物について説明して頂きました。村落のリーダーの方のお話で印象的だったのは、「この村の人が世界のどんなところにも、フェスティバルの時には必ずここに戻って来なければいけない」と仰っていたことです。トラディショナルな儀式や文化に対する熱い気持ちが、強く私たちに伝わってきました。



同じ村落にいても多種多様な考え方が存在していて、それでもこのコミュニティは平和に秩序を保ち、強く硬い絆で結ばれているのは本当に素晴らしく、そして不思議でした。日本をはじめとする先進国では、効率性を重視するあまり貴重な文化が捨てられてしまい、代わりに SNS 文化が根付いた今、他人と自分を比較し、気にしてしまうような時代になってしまいました。美しい文化が世界から消え去っているのです。そんな中、東ティモールでは長い長い植民地時代があったのにもかかわらず、苦難を乗り越え、文化を守り、大切にされています。夕方には Letefoho にあるキリスト像に行き、夕日を見ましたが、そのキリスト像は土着のアニミズムとキリスト教が合わさっていて、ここにも Letefoho 独自の文化がみられました。この素晴らしい Letefoho 文化を肌で感じた私は、これからも独自の文化が継承されていくことを願う気持ちが芽生えました。

## Letefoho 最終日

午前中は、2日目に訪れた農家さんの子どもたちが通っている小学校に行きました。エビカニクスダンスや、折り紙、お箸を使ったリレー、紙風船など、たくさんのことを行いました。初めは子どもたちが緊張していましたが、次第に打ち解け、私たちも幼い頃に帰ったように思い切り楽しむことができました。国は違っても子どもたちのはしゃぐ姿や笑顔は、世界共通だと思いました。



午後は、水汲みを体験しました。Letefohoの女性や子どもたちは毎朝往復30分程度かけて獣道を歩き、水を汲みます。足場が不安定な中、何本も水を抱え、さらにビーチサンダルを履いているので、とても危険だと思いました。その水場を上を動かすプロジェクトを始めている方々とも出会い、少しずつLetefohoの生活が良くなっていると感じました。しかし、水汲みをしている人から見てわかるように家事をするのは女性で、仕事をするのは男性という考え方が強く根付いていることもわかりました。女性の権利という概念がないことは、Letefohoの課題だと感じました。

Diliに帰る前には再びLetefohoを散歩し、一日目に話しかけてくれた男の子を含めて、同じ年代の男の子たちと仲良くなりました。過ごした時間は短かったですが、あだ名トークで盛り上がり、とても楽しい思い出になると同時にLetefohoを離れるのが名残惜しくなりました。

Letefohoには、舗装されていない道、毎朝の水汲み、まだまだ浸透していない学校教育など、問題はたくさんありました。しかし、これらが今後改善されていく中で、私たちが強く心打たれた美しい自然や文化、強い絆で固く結ばれた共同体、そしてそんな素晴らしいLetefohoに住む陽気で優しい人々は、ずっと変わらないでいてほしいと強く思いました。そして、私たちはこれからも東ティモールと関わり、彼らのことをもっと知りたいと思っています。次回、東ティモールを訪れるまでにコーヒーや教育、テトゥン語を勉強し、また東ティモールの不思議な力を感じたいと思います。